

「二輪車のスポーツ ～その認識と教育～」

第3回「二輪車スポーツの環境づくり」

交通教育NPO OSCNじてんしゃスクール 代表
片山 昇

～ 年のはじめ ～

正月三が日、合計40kmほどのサイクリングを楽しんだ。上り下りが頻繁におとずれる郊外の道ともなれば、ゆっくりと走行していても、汗ばむほどの運動量になる。凜とした空気の中で、安全に走行するための集中力も冴えわたる。立ち寄った神社では、一年の交通安全を誓った。

～ 歩く バルザック ～

SL通信No.74「近代スポーツ、近代オリンピックの行方」の中で、山本徳郎氏はバルザック(仏)著述の『風俗研究』(※1)から、『歩きかたの理論』(1833年)について引用しておられた。

人間の移動にとって基本動作である「歩行」に着目した歴史的文献という点に、私はとても興味をそそられ、その本を紐解いた。

バルザック(※2)は次のように述べている。「・・・歩きかたの理論は、私の見るかぎり、これまでに知られる知識の中でも最も新しい科学であり、これほど興味をそそられるものもない。ほとんど誰もまだこれに手をつけた者がないのである。もったいなくも歩行の科学が手つかずとはまたどうしたわけか、・・・」、「私にいわせれば歩きかたこそ思想や生活を正確に表す症状なのだから」。

そこには、当たり前すぎて意識されることもなかった「歩く」という人間の基本動作への洞察が描かれている。小説家として人間の行動と心を俯瞰したバルザックらしい視点だ。

その当時、19世紀前半迄のフランス市民の移動手段といえば、歩行か馬車等の集団乗車的な乗り物が中心だった。

山本徳郎氏は、バルザックの試みをとらえて、「(仏市民革命後の)動きの乏しい社会から動きの激しい社会へ移行した近代社会の成立期に、それを社会的背景として近代体育やスポーツが教育の一環として行われ始めただけに興味深い」と述べておられる。

まさに、市民革命の後に生じた産業革命の激流の中で、自動車や二輪車の移動手段も人々から求められ誕生し、普及していったのであろう。

バルザック(1850没)の時代の後に、歩行以外の個々人の足となるプライベート的乗り物(自動車・二輪車)が市民に定着していく訳だが、かの小説家の目には、後世の移動様式の激変は、どのように映るのであろうか。

欧米諸国はバルザックの時代ですら、馬や馬車などの乗り物の歴史が既に数百年続いていた。後年、自動車や二輪車の誕生も早く、19世紀終盤には、その所有と運転が、市民の間に広まり始めていた。

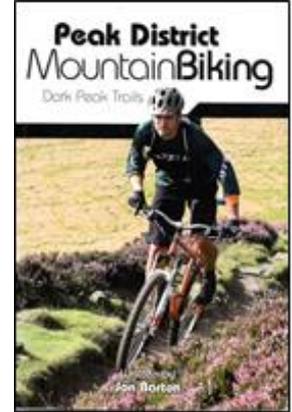
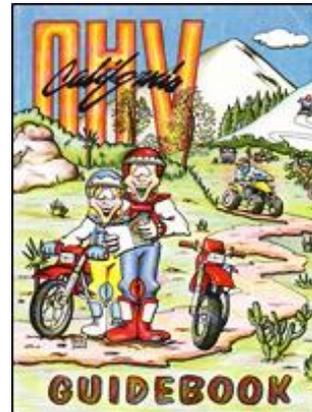
一方、日本では、自転車やオートバイといった二輪車が市民に普及したのは、1945年の終戦以降だ。

プライベート的乗り物としての二輪車普及における約半世紀の差が、二輪車という乗り物に対する感覚や

価値観の差を生み、さらには、その文化の違いを生じさせているように思える。(※3)

～ はしる権利 あるく権利 ～

早くから馬を原動力とした乗り物交通が発達した欧米社会で、20世紀中盤以降から顕著なのは、交通参加者の行動に関する基礎教育の充実と、二輪車が公的に走ることのできる、街や郊外での環境整備進展だ。



手もとに二つのガイドブックがある。

ひとつは、私が1996年にオートバイレースで遠征した際、米国カリフォルニア州で入手した本。オフロードの乗り物専用公式エリアを紹介した「California Off Highway Vehicle (OHV) GUIDEBOOK」だ。(写真左※4)

米国カリフォルニア州は、日本の国土とほぼ同面積である。この半世紀、レクリエーションエリアの一環として、荒野(砂漠)地域に州知事の許可の下、オフロード走行を楽しむ為に、OHVエリアが多数誕生してきた。

もうひとつは、後程紹介する中島蔵人氏が、英国赴任中(2010年代)現地で入手した本。

「MOUNTAIN BIKING GUIDEBOOKS」シリーズ中の一冊、「Peak District Mountain Biking - Dark Peak Trails」(写真右※5)だ。マウンテンバイク(※6)でも通行可能なコース「rights of way」(※7)が紹介されている。

英国のウォーキングに関するレポート(※8)によれば、「18世紀の産業革命以後、劣悪な環境で働く労働者たちは清浄な空気や水、レクリエーションの場を求めようになっていった」。その帰結としての、労働者の行動に端を発した「歩く権利法(Rights of Way Act 1932)の成立」がある。

それが後年になり、マウンテンバイクやその他の二輪車を対象にしたエリアの開放、公的に走行することができる権利の獲得へと繋がってきたようだ。

どちらのガイドブックでも、オートバイや自転車等で走行可能な公的エリアやコースが紹介されている。楽しむための心得として、装備や他の利用者(ハイカーや乗馬者)への配慮の大切さ、利用上の規約、そして、自己責任の下での利用等が明記されている。

このように英米では、二輪車の専用コースや公的に走行可能なトレイル/エリア(※9)が数多く設定されてきた。自然へのアクセスの一段として、また、レジャーやスポーツのひとつとして、二輪車を社会生活に取り入れようとする傾向が、数十年という歴史の中で定着してきた。

それは、市民の自発的行動によって、行政を巻き込み行われた権利獲得の所産とも言えそうだ。

～ 市民が行動 ～

近年、日本でも、二輪車が公的に走れる場所を増やそうと市民が呼びかけ、周囲を巻き込み、持続可能なコースづくりを推進する動きが多く見られる。

1970年前後の日本では、自転車やオートバイの二輪車普及が進み、高度経済成長後の野外活動やレクリエーション活動推進の一環として、国や行政、二輪車の公的普及団体（サイクリング協会等）、後には、二輪関連の民間企業の主導による環境整備が行われた。

しかし、ここ最近では、二輪車愛好家や地域の住民などの市民自らが行動を起こし、行政や関係機関を巻き込んで、公的に走行可能なコースづくりを興し始めている。この点が、新たな動きとして特筆に値する。

～ 持続可能なコースづくり ～

先駆けとなった例を紹介しよう。「体育とスポーツの図書館」からほど近い豊田市三河高原にあるMTB走行専用コース“26ism あさぎリトレイル”だ。創設者の中島氏に、直接お話を伺った。（※10）



中島 蔵人氏
1975年愛知県生まれ。高校大学時代はMTBの遊びや競技に熱中。長期の海外赴任を通じ、英米の自転車文化に触れる。その時の体験を基に、愛知県内にMTBトレイルパーク“26ism”ニイロクイズム（※11）を立ち上げる。

——どんなMTB生活でしたか。

「アメリカ中西部で駐在生活をしていた頃には、家から15分走りさえすればMTBで思い切り走れるオープン（公的）トレイルが幾つかありました。」

「北米各地の州立や市立公園内には、自転車も走行可能な多くのトレイルが存在しています。その環境の中で自然に親しみ、MTB走行を思う存分楽しむことができました。」

——帰国後は 驚かれたそうですね。

「楽観的な期待を持って帰国しました。日本でもすでに楽しいMTBトレイルがたくさん誕生しているに違いないと。しかし、愛好家が無許可で私有地や林道を走ったり、登山道でハイカーと接触事故を起こしたり、社会問題になっていることを知りました。」

「MTB立ち入り禁止、の看板が次々と立つ状況も散見され、愕然としました。」

「持続可能かつ地域と密着したフィールドを、自分たち愛好家の手で造るしかない、決意しました。」

——2つのMTBコース（トレイルパーク）が誕生しました。2010年には岡崎市に（くらがり溪谷キャンプ場隣接）、2011年には豊田市（三河高原キャンプ村内）に。実際のコース作りには、たくさんの準備と労力が必要だったのでしょうか。

「欧米の様々なトレイルを走行した自らの経験を生かして、コースの設計を行いました。」

「コースの造成作業には、私の思いに賛同してくれ

るMTB愛好家たちが、ボランティアで意欲的に関わってくれました。コース周辺の地域社会とのギブアンドテイクなシステム作りが基礎となっています。」

——山林の使用許可はどのように。

「地域の方々に向けて、説明会を何度も開催し、理解と協力を得ました。」

「地権者の資産である山林をお借りするので、山林利用料をお支払いします。地域と自然環境を守りつつ行うことが大切です。」

「同時に、地域の活性化、賑わいづくりにもつながるようにします。コースの利用者からは、千円程度の走行料金を頂きます。キャンプ場のそばにコースを造り、受付業務もキャンプ場に委託することで、駐車場やトイレも利用できます。周囲の施設、BBQ場や釣り場などの宣伝にもなり、地域活性化にもつながりました。」

「このトレイルコースの存在が、地域と一緒にあって、その土地で新しい価値を創造できるようになれることを目標に運営しています。」

——今後の活動について教えてください。

「気がつけば、MTBの一愛好家として楽しむ側から、より多くの人々が楽しめるような場所づくり、つまり、このスポーツを広めて支える側へと活動が変化してきました。」



「MTBという乗り物を通して、地域・山林を取り巻くポジティブなサイクルを生み出せるように、今後も活動していきたいと思っています。」

～ 二輪車スポーツの未来 ～

以前、中島蔵人氏の呼びかけで、私もトレイル造成を手伝ったことがある。三河高原キャンプ場併設のトレイルがオープンしたばかりの頃だった。

それ以来10年。現在も多くのMTB愛好家が利用する。私の場合は、身体的トレーニングを目的として年間10回ほど訪れ、集中して走行することを楽しんでいる。

今回、9年ぶりに中島氏に会った。彼の言葉からはMTBの世界を楽しむ一市民としてのシンプルで揺るぎない思想を改めて感じることができた。

大学時代から現在まで、私にも、オートバイや自転車の専用コースづくりに携わった経験がある。富士山や南アルプスの麓などで、シャベルやツルハシを振る、木の根っこを掘り起こしたこともあった。

また、道路使用許可を取り、公道で自転車レースや交通安全啓発の催しをひらいたこともあった。その地域の行政、警察署や土地所有者との手続きや交渉など相当な時間と労力が必要とされた。

一連の行動の根底にあるのは、ひとりの愛好家として、二輪車スポーツを楽しむための社会的環境を創りたい、という思いに他ならない。

現在、東海や中部地方には、市民発案型の専用トレイルが、数多く誕生し始めている。

日本の二輪車スポーツ文化にも、明るい兆しが見え

てきた。

次回は、「二輪車運転がスポーツ？競技と移動の視点から」と題して論じたい。

～ 参考文献と注釈 ～

(※1) 『バルザック風俗研究』(山田登世子 訳・解説, 1992, 藤原書店)「人間喜劇」作品群中の分析的研究のひとつ「社会生活の病理学」(1833) (Gallimard, 1981) の全訳作品。

(※2) オノレ・ド・バルザック (仏・1799-1850) 小説家 近代リアリズム小説。「人物の顔かたちから、服装、建物の表情まで、彼の小説にあふれかえるものやひとの外見の記述は、このデータの巨大な集積である。見知らぬ人々の織り成す『交通』の場であるモダン都市に生起するドラマは、もはや外面的データの無い抽象的な心理劇という形をゆるさないものであった」※1あとがきより抜粋

(※3) 「マウンテンバイクによる滑降等の乗入は禁止となっております。歩行者に迷惑となっておりますので、絶対に行わないでください。小幡緑地管理事務所」と記載され、園内各所の小径入り口付近に、3年前から設置されるようになる。2022年1月名古屋市守山区小幡緑地公園本園山林脇の道路にて 撮影:片山



(※4) 『California Off Highway Vehicle (OHV) GUIDEBOOK』 (HarryLewellyn, 1991, p199, Dept of Parks and Recreation, USA)

(※5) 『MOUNTAIN BIKING GUIDEBOOKS』 (Jon Barton, 2016, p195, Vertebrate Publishing Ltd, UK)

(※6) マウンテンバイク (MTB) は、不整地走行用の自転車の車種のこと。MTB やバイシクルモトクロス (BMX) の名称と独特の車両スタイルは、1970年前後の米国カリフォルニア州で、自転車での、青年たちによる山下り遊びや少年らによるオートバイモトクロスの真似事遊びが発祥。現在では、それらのスポーツも多種目に分化。又、他国でも不整地でおこなう自転車スポーツは、それ以前から誕生。サイクルポロ (アイルランド 1891)、シクロクロス (フランス 1900年代初頭)、BTR (バイクトライアル/スペイン 1970頃)、パスハンティング (日本 1970前後) があり、使用する車種形状もそれぞれ異なる。

(※7) 「rights of way」 以下※8のレポート文献より引用 『rights of way には4つの形態があり、それぞれの道を通ることが許されている利用者が異なる。また道中に表示する矢印のマークもそれぞれ種類ごとに色分けされている。これらの rights of way の総距離は、ウォーキングを推進するチャリティー団体 Ramblers によると、イングランドとウェールズだけでも 14 万マイル (22 万キロメートル) 以上にもおよぶという。地球一周が約 4 万キロメートルであることを考えると、いかに国土中に細かく張り巡らされているかがわかる。』 ちなみに、自転車については、4 形態中の 3 形態での通行が許可されているようだ。

(※8) 引用文献『イギリスにおけるウォーキングの取組事例と地域への貢献について』(ロンドン事務所 宇野 真由美, 2020, 一財 自治体国際化協会, CLAIR REPORT No. 504)

(※9) MTB コースとは、マウンテンバイク走行専用につ造られたコースを意味する。ダウンヒルやクロスカントリー等の競技種目内容に応じたコース設定となっている。公的に MTB 走行可能な山道のようなルートも、MTB コースと称される場合も多いが、欧米諸国では、そういった場合は、『MTB トレイル』と呼ぶのが一般的である。また、そういったトレイルを数多く含んだ地域を『エリア』と呼称する場合もある。

(※10) 2021年11月豊橋市にて。掲載内容については、中島氏に承諾を得ている。

(※11) “26ism” ニイロクイズムの名称は、中島氏が MTB トレイル構想をスタートさせた当時、マウンテンバイクのタイヤサイズの主流が、26インチが一般的であったことに由来する。つまり、他のタイヤサイズの自転車とは異なる 26インチタイヤの MTB を想起させる数字として起用したとのことである。 「ism」をつけることで、そのタイプの自転車を志向し自然を楽しむ主義といった意味合いを表現しているようだ。 26ism のホームページ 「<https://www.26ism.com/>」